

機関番号：34304  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21820068  
 研究課題名（和文） 日英バイリンガル生徒のコードスイッチング  
 ：文法構造面からの横断的研究  
 研究課題名（英文） Japanese-English bilingual students' code-switching  
 ： a cross-sectional study from the structural perspective  
 研究代表者  
 難波 和彦 (NAMBA KAZUHIKO)  
 京都産業大学・外国語学部・准教授  
 研究者番号：10550585

研究成果の概要（和文）：バイリンガルが、日本語と英語の間で言語を切替（コードスイッチング）している発話を収集し、文法的構造面での分析をするのがこの研究の目的である。バランス・バイリンガルの自然な日英語によるやり取りを録音・書き起こしをし、約10時間、1万文を超えるコーパスを作り、そこに現れるコードスイッチングが、母体言語にもう一方の言語を挿入をするパターンなのか、言語そのものの切り替えが行われているのかを観察した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to look at bilinguals' code-switching phenomena from the perspective of grammatical structure. Naturalistic interactions of balanced bilinguals were recorded, transcribed and formed into a corpus consisting of over 10 thousands clauses. The code-switched clauses were examined to ascertain whether items from one language were inserted into a main clause in the other language, i.e. the insertion pattern or whether the speaker was switching from one language to the other, i.e. the alternation pattern.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,040,000	612,000	2,652,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、バイリンガズム、コードスイッチング、定式表現

## 1. 研究開始当初の背景

(1) バイリンガルが発言の中で言語を切り替える現象であるコードスイッチングで、一つ

の文の中での言語の切り替えに、どのような文法的制約が働いているのかについては、Poplack (1980) の大規模な研究以降、さまざま

まな言語の組み合わせで、研究が行われてきた。特に言語類型として離れた言語間のコードスイッチングは（例えば、SVO 言語の英語と SOV 言語の日本語）、二つの文法が相互にどのような影響を与えているかを見るには、興味深いものである。

(2)コードスイッチングの文法面を見ると、生成文法などのフレームワークを使って説明が試みられてきたが、言語産出の観点から考案された Myers-Scotton (1993) の Matrix Language Frame model (母体言語フレームモデル、これ以降は MLF モデルとよぶ) は、広く影響力のあるフレームワークであり、一方の言語が母体となり、もう一方の言語がそこに挿入されるというパターンを原則として打ち出したもので、コードスイッチングでは、2 言語のうちどちらが母体言語であるかは、形態素の語順と、機能語がどちらの言語から来ているかを見ることで決めることができるとしている。

(3)コードスイッチングの文法面に関する日英語間の研究は東(1993),西村(1997)などまだまだ数が少ない。特に MLF モデルを使用したものは、高木(2000), 難波(2008)などにとどまる。難波(2008)では、生まれてからずっと日英バイリンガル環境で育つ兄弟のコードスイッチングについて、縦断的研究を行った。そこでは、日英バイリンガル児のコードスイッチングは MLF モデルで説明できるのか、そうでない場合はどんなプロセスが起きているのかが、探られた。

そこでは、全体の 58.2%が MLF モデルでのふたつの原則（形態素の語順、機能語は母体言

語から来ている）にかなったもので、どちらが母体言語ということ判断できた。それ以外の例では、母体言語がどちらかを定めることはできなかった。

(4) Muysken (2000) はこれまで行われてきた数多くの言語間のコードスイッチングの研究を包括的に調べて、前者の場合を insertion (挿入パターン)、後者の場合で二つの言語が文の途中で切り替わっているといえるものを alternation (切り替えパターン) とし、両者については、別のフレームワークで扱うべきであることを提案している。

(5) さらに難波(2008) では、コードスイッチングは Wray の提唱する Formulaic Language (定式表現:イディオム・コロケーションなど複数の語がひとつの塊として脳に貯蔵されている)の内側では、起こらないという仮説が検証され、実証された。

(6) これまでの研究はケーススタディを基にした縦断的研究であり、日本語と英語のコードスイッチングの文法的側面についての、よりしっかりとした理論の構築を行い、他の研究者への示唆となるようなものにするためには、横断的研究を行い、さらに多くのデータで検証をすることが、次のステップであると考えられる。

## 2. 研究の目的

横断的な研究として、複数のバイリンガルからコードスイッチングのデータを集め、難波(2008)で調べた次の 3 つの点についての検証を行う。

(1) Insertion 挿入パターンつまり、MLF モデ

ルで説明できるパターンは、どれくらいの頻度で起こるか。難波 (2008) 同様に、母体言語を判断する基準には、形態素の順序と機能語の原則が用いられる。

(2) **Alternation** (切り替えパターン) の起こる理由として、対人的・談話的機能や引き金の現象が原因となっているのか。

(3) **Formulaic Language** (定式表現) の内側では、コードスイッチングは起こっているかどうか。

### 3. 研究の方法

(1) コードスイッチングを日常的に使用している国際学校のバイリンガル生徒・卒業生の会話を映像と音声の両方で記録した。コードスイッチングは、フォーマルな場面では起こりにくく、リラックスをしているときによくみられる傾向があるので、そのような場面を設定することに配慮した。会話の録音は、こちらで依頼したバイリンガルのインタビューアー (卒業生・生徒) が、他のバイリンガル生徒に話しかける形をとったインタビュー形式のものと、生徒会のミーティングをそのまま録音したものを行った。

(2) 音声と映像はデジタルデータとして、コンピューターのハードディスクに保存し、DVD を作成した。この DVD をもとに、書き起こしをバイリンガルの卒業生に依頼した。

(3) 書き起こしたデータに日本語・英語の tag をつけ、コードスイッチングをしている部分を取り出し。insertion パターン、alternation パターンの判断をし、質的な研究を行った。

### 4. 研究成果

(1) 日本国内では希少な国際学校 (帰国生用の学校とインターナショナルスクールのデュアル・スクール) という環境、友人間でのリラックスをしたインタビュー形式という方法が、効果を表し、日本語と英語のコードスイッチングのデータが、数多く得られた。書き起こしには、汎用性のあるバイリンガルデータ専用のフォーマットを用い、また各被験者の言語背景についてのデータも集めたので、今後多角的な分析が可能になると考えられる。

(2) データは一語一語に日本語か英語かの言語のタグ付けを行い、Muysken (2000) の枠組みを使い、母体言語がありそこに他の言語を挿入する、という insertion (挿入) パターンか、母体言語そのものが文の途中で切り替わる alternation (交替) パターンなのか、まず分類を行った。

(3) 挿入パターンに関しては、Myers-Scotton (2002) の MLF モデル+4M モデルで説明できる場合が多いが、日本語の助詞などをどのように分析するかについては、新たなモデルを提唱していく必要があると考えられる。難波(2008)で行ったバイリンガル児のケーススタディの縦断的研究では、英語が母体言語となるが多かったが、本研究では、英語・日本語どちらが母体言語になるパターンが見られた。

(4) alternation のパターンでよく見られたのは、英語のディスコースマーカーや付加疑問、日本語の終助詞といった語用論的な要素の前後でコードスイッチングが起こりやすいと

いうことである。また、Clyne (2003)の枠組みである triggering (引き金作用)が alternation を引き起こす原因の一つとなっているように考えられる。特に日英語の CS ではよく見られる portmanteau (両開きのカバン)のパターンは、英語で文が始まり triggering が起こり、日本語にスイッチするパターンになっているが、引き金となっているのは、社会言語学的要因、語用論的要因、言語構造的要因など様々なものがあり、今後さらなる研究が必要だと考えられる。

(6) 発話者がバランス・バイリンガルである度合いが低い場合は、insertion のパターンが多くみられるが、度合いが高くなってくると、insertion に加えて alternation が起こる回数が多くなり、母体言語そのものの切り替えが頻繁に起こっていることが観察された。この原因の一つとして、Grosjean (2001) の提唱する Language mode で、バランス・バイリンガルは、二つの言語間での切り替えが起こりやすい Bilingual Language Mode の状態になりやすいということが考察される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1)Namba, K. (2009). A continuum-based model for insertional code-switching: Japanese nominal insertions in English Matrix language frames. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*. 15 (1):18-40 (査読有)

[学会発表] (計4件)

(1)Namba, K. *Linguistic Analysis of Code-switching*第3回 第1言語としてのバイリンガリズム研究会. 2010年10月16日. 大阪・関西学院大学梅田キャンパス

(2)Namba, K. *A Structural Approach to Code-switching*. 8<sup>th</sup> PhD Summer School in Linguistics. 2010年6月24日. University of the West England, UK

(3)Namba, K. *The Role of Formulaic Frames in Alternational Code-switching* 4<sup>th</sup> International FLARN (Formulaic Language Research Network) conferences. 2010年3月25日. ドイツ国 Paderborn 市・Paderborn 大学

(4)Namba, K. *Verb Insertion in English-Japanese Code-switching* 全国語学教育学会 (JALT) 年次国際大会. 2009年11月20日. 静岡・グランシップ静岡

[図書] (計1件)

(1)Namba, K. (2010) Formulaicity in Code-switching: Criteria for Identifying Formulaic Sequences. In D. Wood. (ed) *Perspectives on Formulaic Language: Acquisition and Communication*. London: Continuum, 129-150.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

難波 和彦 (NAMBA KAZUHIKO)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 10550585

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし